

スギタマバエによるスギ被害量の研究 (Ⅳ)

— 殺虫剤による産卵予防の影響 —

林業試験場九州支場 吉 田 成 章
 倉 永 善 太 郎
 森 本 桂

Ⅱ報でスギ生長が良好の場合にはスギタマバエ被害によっても次年度春芽の数の減少はみられないことを報告したが、生長不良の場合はスギタマバエ被害によって次年度春芽の減少があることが考えられたため、生長不良林の要因の一つとみられる土地条件の悪い林について、被害を減らすことによって次年度芽数の増大があるか否かを調査した。

試験地及び処理

菊池深葉国有林 2 林班お小 班 (Ⅰ区) 及びの 小 班 (Ⅱ区) は土壤の浅い凸形地型でスギは 13 年生でありながら樹高 3 m 程度と生長が悪い。1973 年の産卵期直前と最盛期にこの試験地の一部に産卵予防のため、葉面に

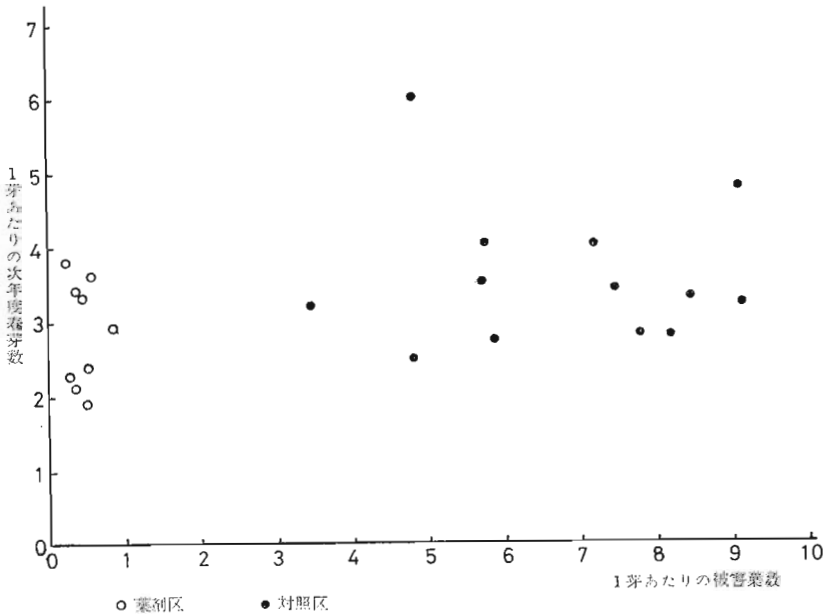
バイエタン 500 倍液を散布し、地上にはダイアジノン粒剤をまいた。この産卵予防の結果被害葉を 30% 以下にすることができた。

標本抽出法、調査法はⅡ報の方法によっている。

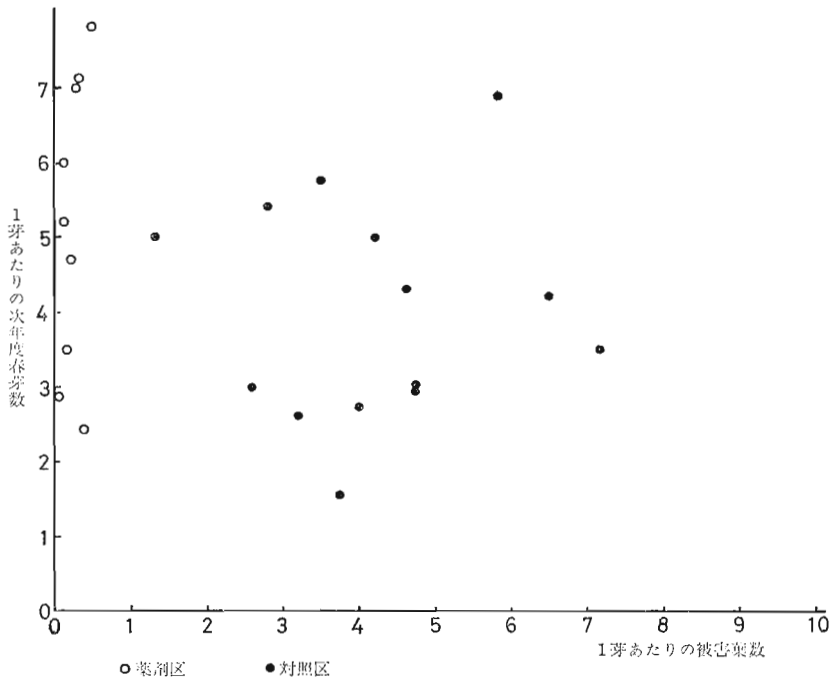
結果及び考察

従来から殺虫剤散布による被害の減少によって次年度葉量を増すことができるといわれてきたが、図のⅠ、Ⅱ区に示すように芽数に関しては増大しておらず無処理区と同様のばらつきを示しているに過ぎない。

このことから、土地条件の悪い場合に於いてもタマバエによる被害が相乗的に次年度春芽数に影響するとは思われない。



図一 1 薬剤区と対照区での一芽あたりの被害葉数と次年度春芽数の関係 (Ⅰ区)



図一 2 薬剤区と対照区での1芽あたりの被害葉数と次年度春芽数の関係 (Ⅱ区)